

- 特集 1「歿後60年 椿貞雄  
師・劉生、そして家族とともに」  
担当学芸員に聞きました！「ひとりの画家として生きる」
- 特集 2「CCMA コレクション いま／むかし うらがわ」  
「裏側からのメッセージ」
- コラム田中一村の関連図書コーナーができました
- 連載館長のつれづれだより
- 連載ボランティア日和



椿貞雄《(パリ個展肉筆ポスター)》1932(昭和7)年 米沢市上杉博物館蔵



館長のつれづれだより  
椿貞雄展に想う

椿貞雄という画家の名を耳にし、その作品を目にすると、わたしの記憶の中でいつも思い出されるのが、その生涯のある期間を、慶應義塾の幼稚舎で図画教師として過ごしたことです(註1)。

椿のことや岸田劉生の児童に対する図画教育などについては、大学時代の恩師であった八代修次教授の話や論文によって知ること、すでに学生時代に些かの興味を覚えたのでした。ですから個人的にも今回の椿展には、大いに期待するところがあります。

八代教授は、「草土社と図画教育」(註2)という論考のなかで、教育学者で、慶應義塾大学文学部の教授であった小林澄兄が、幼稚舎の主任に就任すると、当時流行していた「自由教育」の思潮を背景に、「自己を表現する」教科を重視しようとしたので、綴り方、図画、手工などに特に意がもちいられたと言っています。そのために、自由画論者の山本鼎を招いて自由画教育に関する講演会を開いたりもしています(大正9年11月)。一方、大正10年ころから活発に論じられた、劉生による図画教育観に、理想的な児童教育を目指す幼稚舎のスタッフは、共鳴するところがあったようで、劉生に幼稚舎生に図画を教えるよう依頼したとも言われています。しかし、これは不調に終わり、清宮彬と河野通勢がその任に就きました。河野は、劉生が「図画教育論」の中で提唱した「自由臨模」ということを尊重し、児童に美しい画を見せ、これを手本に、時には河野自身が黒板に静物などを描いて、自由に模写させ、それに自由に着色

させたといえます。河野は、昭和2年に退職。同年6月から、代わって椿貞雄が幼稚舎の図画教師になります。椿は、舎生に油絵を描かせる尖端的かつ独特の図画教育を行っています(教室が汚れるという理由で、ある期間をもって中止)。清宮は昭和19年に、椿は同20年3月に退職しますが、ここに実に23年間におよぶ幼稚舎と岸田劉生ら草土社の人々との付き合いが確認されます。このことは児童に対する図画教育としては、まさに画期的なことと言えましょう。

現在、慶應義塾幼稚舎には、椿貞雄筆の《娘図》と《富士山(河口湖)》の2点が所蔵されています。《娘図》には「昭和28年椿貞雄写」のサインがあります。顔の部分に彩色がある素描風の油彩で、おそらく孫娘の彩子を描いたのでしょう。《富士山》は、裏面にある画家の署名によって、昭和12年に描かれ、昭和26年までの間に何度も加筆されていることが知られます。椿朱明氏による寄贈です(註3)。いずれも佳品ですが、わたしの物忘れと迂闊さから今回の展覧会には展示が叶いませんでした、いずれ借用して展示の機会を持ちたいと思います。

今回の展示では、よく似ていると言われる、椿と劉生の画ですが、似ているところに違う個性を見出すことの興味深さ、面白さを十分に味わうことが出来ると思います。わたしは、特に椿の「静物画」に注目して見てみたいと考えています。皆さまにも是非、ご来館のうえ、ご鑑賞頂きますよう、ここにお願い申し上げます。

[館長 河合正朝]



左:椿貞雄《娘図》  
右:椿貞雄《富士山(河口湖)》修復後

註1：昭和2年6月から昭和20年3月まで。その間、昭和7年4月～同年11月は外遊のため休職。  
註2：八代修次「草土社と図画教育」『哲学』第88集(1989)。慶應義塾では小学校を幼稚舎、その校長を主任と呼んでいました。現在は、校長を舎長と言っています。八代が幼稚舎史に関して参照している吉田小五郎『稿本慶應義塾幼稚舎史』(1965)の著者吉田は舎長(昭和22年4月・同31年3月)の職にあったことがあります。  
註3：「椿貞雄《富士山(河口湖)》の修復」『慶應義塾大学アート・センター年報18』(2010)参照

田中一村の関連図書コーナーができました。

千葉市ゆかりの日本画家・田中一村(1908～1977)の著作権継承者である新山宏様より、作品図版が使用された書籍をはじめとするさまざまなメディアの資料を一括で寄贈いただきました。このほど図書室に「新山文庫 田中一村関連資料」棚を新設し、一部をご覧いただけるようになりましたのでお知らせします。



美術図書室 新山文庫の棚

画家とその作品は、現物の作品や一次的な資料だけでなくそれ以上に、さまざまなメディアを通じて受容されます。そして新たなイメージが喚起され解釈がなされるなど、作品の世界や意味が広がっていきます。一村は、没後はじめてテレビ番組を機に急速に知られるようになった画家です。2010年に開催した展覧会「田中一村 新たな全貌」においてはこういったことも重視し、一村の作品がどのように受容されてきたのか、資料の収集と整理につとめ、図録に反映しました。

こうした趣旨を汲みで寄贈いただくことになった「新山文庫」には、書籍・雑誌類だけをとってみても、観光、動植物関係や自然保護、小説や詩、音楽、道徳や国語の教科書や教材、行政資料など、美術関連をはるかに上回る多くの文脈で、画家とその作品が取り上げられてきたことが如実に示されています。新聞記事、ポスター、CD、切手、テレホンカード、焼酎のラベルに至るまで、書棚に配架できないものも多数あり、整理も途中で成長中ですが、画家のアーカイブとしては特色のある一群となっています。

[上席学芸員 松尾知子]

「新山文庫」は、図書室に開架の図書のみ閲覧が可能です。



図1 椿貞雄（自画像）1915（大正4）年1月9日  
千葉県立美術館蔵

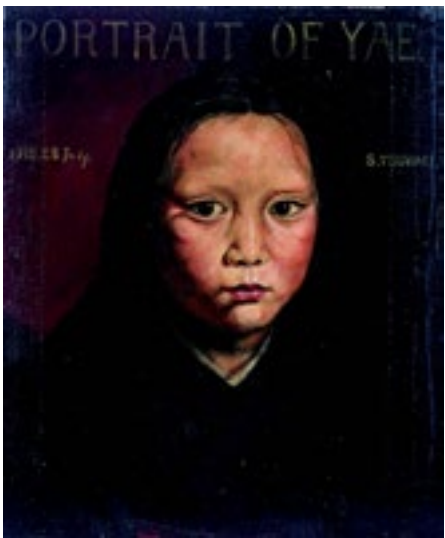


図2 椿貞雄《八重子像》1915（大正4）年7月28日  
東京都現代美術館蔵



図3 椿貞雄《春夏秋冬極楽図》1932（昭和7）年 千葉市美術館蔵

担当学芸員に聞きました！

## ひとりの画家として生きる

### 椿貞雄と岸田劉生

今回ご遺族のみなさま、全国の美術館はじめ所蔵者の皆さんのおかげで、椿貞雄の展覧会を何とか開催できる運びとなりました。これはどれだけ感謝しても足りません。

椿貞雄の画業が見直されるようになったのは、ここ 10 年ぐらいではないでしょうか。ちょうど研究者や芸員の世代も変わってきて、冷静に見ることができるようになった。

それまではどういう風に見られていたんですか？

今も昔も、椿の絵が好きな一般の方々は多いです。反対に研究者になると以前は「草土社の…」とか「劉生の…」という括りでとらえがちだった。

なるほど。それで今回没後 60 年を機に展覧会を。椿は劉生が亡くなってから、結構長く生きてますよね。

椿から見た劉生というのは、比喻は変だけれども、中学高校あるいは大学のサークルの先輩みたいなものだったかもしれない。閉じられた空間の中では絶対乗り越えられない存在っていうのでしょうか。

劉生の死が早すぎたんですよ。39 歳で亡くなって……。でも、未だにその影響は大きいと思います。彼の文章にはグルーヴ感がある。それに乗ったらすいすい読むことができるような。でも、一度そのリズムから離れて冷静に見ると、あれ？というところがある。

今回、英文タイトルに「メンター」っていう言葉を使ってますね。それは教師ではなくて、先輩というか、先を行く、まあ良き指導者っていう言い方もあるんだけど。ここを見てつて行くという、その関係がよく出てるのかなと思いました。

劉生が先に亡くなってしまったから、その後の長い時間の中で、劉生から教えられた大きな美術の課題、つまり、油彩画というものをどういう風にこの日本という国に根付かせていくかみたいなことを、背負い込んだというか。

椿は画家仲間からは好かれていたんです。草土社のあとに参加した春陽会にいた時でも、劉生と対立した小杉放庵のグループとも交流しているし、梅原龍三郎が国画会つくるぞっていう時に声をかけたのも椿だから。

そういうことを知らない後の世代の絵描きたちにとっては、どうだったんだろう。過去の人扱い、というのは失礼かもしれないけれど。生身の椿に劉生とか、大正という時代を思い返していたのかも知れない。

椿が千葉に来てから、千葉の画家コミュニティで果たした役割は？

戦前はどうもはっきりしませんね。千葉の美術団体とは接触がなかったかもしれません。やはり戦後です。県展の発足から 10 年ぐらいで亡くなるけれども、大正時代から油彩画の世界で活躍していた画家として、県展というものを支えていく。

椿は根っからの在野というか、いきなり劉生に会っちゃっているわけですからね。

あのショックはすごかったと思います。今回チラシにしている《自画像》は、油絵具を扱ってたぶん 3 作目【図 1】。その前は水彩でした。郷里で油彩は描けなかった。お父さんがうるさかったから。そのため、上京したとき、学費の一部を使って絵具を買ったと言われてます。それで、たまたま椿が下宿していたお婆さんの家の近所に、劉生が家を借りていた。椿の場合、偶然が全部重なっていく。

すごいですよね。「表札を見つけた」みたいなことが書いてありましたものね。その後、展覧会をやっているっていうものにも出くわして、それで初めて本物の劉生の作品を見て、衝撃を受けた。米沢にいた時、絵画はポスト印象派が一番、と思っていたのに（笑）。

劉生の場合、ゴッホやセザンヌの先に何があるかといったら、クラシックだった。これは劉生のなかの論理でしかないけれど、椿をはじめとしてみんなそれに乗ってしまった。柳宗悦がバーナー

ド・リーチに宛てた手紙の中で、あの劉生のしんどい絵に、なんでたくさんの若者たちが集まるんだろうっていうことを書いているけれど、白樺派の中核だった連中にも分からなかった。

それまで、「これが新しい絵画なんだ！」とポスト印象派を主張していた人間が次に発表した作品だったということもあったでしょう。ヨーロッパの美術史を知っている人間は批判するけれども、椿のような人間にとっては初めて見る絵であり、びっくりするものだった。「そういう方向もあるのか」という。劉生はキリスト教に接近していたこともあったから、ヨーロッパの古い宗教画に関心があったのは彼なりの理屈があった。それに加えて北方ネサンスの細密描写。知らない人間にとっては現代美術ですよ、当時の。

なんか、今までにない感じという……。

ところが、椿の絵を追っていくとわかりますけれど、初期の自画像の初々しさが急速に無くなってくる。弟を描いた絵あたりまでは良いんだけど、2 週間後、妹を描いた作品を見ると、何か椿とカンパスの間にヨーロッパの古典絵画があって、それをなぞっているような絵になっている【図 2】。

一方、劉生にしてもあれだけ古今東西の美術を語っていながら、オリジナルをどれくらい見ていたのか。早すぎた晩年に、東洋の美術に目覚めても、見に行くのは主に古美術商のところか、売立会や展覧会ですから。あまり、当時のビッグ・コレクターのところには行っていない。横浜の原（三溪）一族との関係ぐらいいでしょうか。

直で見ているのが、すごく少ないですよ。印刷物で出回っていたってことでしょうか。

海外から流入してくる雑誌もありますし、日本の古美術なんかも複製、モノクロの写真版が入手できた。劉生は、そういう複製技術時代のなかで自分を探った。非常に観念的なところがあるんです。だから技法が破綻しても、自分の気持ちが晴ればそれでいいっていうようなところがある。椿にはそれはないですから。

### スイカ、冬瓜、カボチャ。特徴的なモチーフ。

話は変わりますが、私は椿貞雄って言われた時に最初に浮かぶのは、やっぱりスイカを食べている人。《春夏秋冬極楽図》【図 3】です。コレクションのなかで何度も見えていて。

もともとは劉生が描いています。ただ、劉生も油彩で描けないから、墨と水彩で描いています。スイカを食べるっていう、そののどかさを油彩で描けなかったんですね。

油彩はかっちり描き込むものだった？

すぐくばかばかしい話に聞こえるかもしれないけれど、昼寝している人間をどう描くかっていうのは、近代の洋画家にとってはすごく大きな問題でした。で、描けないから、油彩画家も水墨で描きましょう、となってくるわけ。

その、水墨のリラックス感というのは、日本人らではないですか？

それが、彼らが東洋を発見した理由のひとつ。今回分かったんですけど、劉生と椿の世代、数年しか違わないけれども、かなり画材は変わってきているんです。今よりも身近だったかもしれないけれども、椿にとって筆とか墨は劉生ほど身近ではなかった。一見岩絵具で描いているように思ってたけれど、よく見たら水彩絵具なんです。

ちょうど時期的には船橋の小学校で教え始めるような時期ではありますよね。学校で教え始めたことが、何か関係しているのでしょうか？

それは学校の教材という意味ではなくて、生活が安定して、落ちついて絵が描ける環境になったということでしょう。

スイカ以外にも、いくつか特徴的なモチーフが、今回出てきますよね。

あとは冬瓜やカボチャでしょうか。「冬瓜」は劉生から教えてもらったんです。

劉生が発見したモチーフ？

いや、中国絵画の画題としては、劉生が関心を示した宋元画にあります。面白いのは、冬瓜って食べる習慣がない家では絶対お目にかからない食べ物ですよ。カボチャなんかと違って。劉生は冬瓜を知っていたけれど、椿は知らなかった。彼にとっては「食べ物」じゃないんですよ。オブジェなんです、描かれる対象。

静物画のモチーフとしてはやっぱり、その重量感というか、かたまり感が。やっぱりかたちになるんでしょうね。

昭和時代に入ってから自分の子どもや孫たちを描いています、この人の本領は静物画だったんじゃないかなあ。けれども、椿は劉生がやり残した問題を解決するのにずっと悩んでいた。子どもや孫たちを描くことで、ある種救われているところはありますけれどね。

### 椿貞雄の問題意識、劉生以降の試行錯誤。

その、解決すべき問題とは？

油絵で、どうやって東洋的な空間とか、宋元画を見るように見られる油絵を描くのかという、劉生がやりかけていた問題。それまで細密描写でずっとやってきたけれども、戦中あたりから悩むわけです。実は、1930 年代にその問題は新しい局面を迎えて様々な議論が起こったけれど、椿は劉生に導かれて画家になったから、なかなか彼の世界から脱け出すことができなかった。でも、国画会に入ってから、つまり昭和時代の椿は、先輩の梅原龍三郎や自分より若い香月泰男から学んだりしているんです。劉生が亡くなったあと、いろんなものをどん欲に学んでいる。椿はずっと周囲の画家たちの活動を見ているんです。パリにいた時は、古いものからピカソまで見

ています。パリでモデルを描いたものを見ると、ちょっとフォーヴっぽいものがあったりするし。たとえば、パリでモデルのヌードを油彩で描いた作品がありますね。学芸員の特権ですが、絵の裏を見るでしょう？生カンバスと思っていたら、裏に地塗りしてあるんです【図 4】。だから、裏側を使って描いてある。なんでだろうと思ったら、ヨーロッパ人の、女性の体毛の感じを出したかったんですね。

もわもわとした感じを出したかった？すごい工夫ですね、それ。劉生が亡くなって、だから遊学したんですね。そして行った先で、本当にいろんなものを見ている。

そうですね。椿が私たち学芸員の大先輩である土方定一さんに言ったことですが、イタリアに行った時に最初に見たのがレオナルド・ダ・ヴィンチの作品だった。初めて本物を見たとき、「頭髮が総毛立って一瞬にして白髪になる思いがした」って。そのくらいショックを受けています。

それで、戻ってきて東洋なんですよ？

結局、いろんなものがあるんだ、と。自分は自分の道を歩くしかないんだということを改めて知って帰ってきた。でも、こういう絵描きさんがもっといっぱいいてもいいような気がしますけどね。

やっぱり研究されていない？

例え話になりますが、王や長嶋だけで野球はできないでしょう？時代のなかで、椿はスター選手の横で渋いところを担っていた。劉生が亡くなったら、次のチームへ行って梅原を支える、というような。椿から見た美術史というのがあるだろう、という気がするんですよ。それに、この人の絵は古くないんです。今の日本人の間尺にもあっているような気がしますけど。自分の家で毎日見て暮らすことができればいいな。



図4 椿貞雄《アンドレ様体》1932年（昭和7）千葉県立美術館蔵



図5 椿貞雄《冬瓜図》1947（昭和22）年 個人蔵



図6 椿貞雄《冬瓜図》1949（昭和24）年（50.51年加筆）個人蔵

市井の人々ということを書かれていましたね。身の丈に合った、というたとえだけれど。日本人として、何をどう描くか、ということですよ。それはまだ解決されていないと思うし。それを考える上で、すごく面白い作家ですね。

そうですね。当館が所蔵している冬瓜の油彩は最後までアトリエに残っていたかもしれないけども、もっと変わっている可能性があったし……。戦時中から戦後の作品を見ていくうちに、この人はどうやって絵画の空間を成立させていくかということを考えた結果、光というものを意識するようになったんだということがわかりました。単に東洋回帰と一言で片付けられない、コンテンプラリーな問題意識がそこに見えてくる。今でも現代美術のなかで引き合いにだされることがあるイタリアのモランディがやっていたような実験を、椿なりに考えてやっていたんじゃないかな。ただこの人、非常に語彙が少ない。語彙が少ない上に、日本語の思考によってヨーロッパ由来の技術で絵画を描くという、非常にめんどろなことをやっているわけです。

これまで椿は「劉生の～」という流れで語られてきたけれども、実際にはもっと、劉生のような人に隠れて今まで見過ごされてきたものというのが、いっぱいあったということでしょうか。

近代日本美術史を学ぶ者として、椿貞雄といえ、ば、「あいつは劉生の……」で終わらせたままでもいいの？という思いがあります。一見時代から取り残されているように見えるけれども、普通の日本人が絵を描き続けて……。彼の人生はものすごくエモーショナルですが、私たちに近い。だから、近代の美術史を理解する上で、実はこういう人の人生を追って行ったほうが見える景色もあるでしょう。一人のスターではなくて。

劉生の絵のほうが見た目のインパクトはあるけれども、繰り返しになりますが、観念的ですごく理屈っぽい。もう頭の中におそらく、完成された絵があるんじゃないかと思える時がある。劉生が観念的だというのは、ひとつはそれなんですよね。劉生が亡くなった後の椿の絵の描き方って、油絵具をパレットに載せて、描いていく一手一手、

カンバスに筆を置いていく過程というものが、自分が描いている、出来上がつていくかたちとの対話になっている。絵の描き方としては椿のほうが、近代絵画以後のセオリーなのかな。

ただ、劉生の場合、常に自分の身の置き所を描きたかったんだということがあったから一概に椿と比較はできません。劉生は自分の身を包んでくれる世界、自分の周りを飾るであろう、守ってくれる世界を自分で描きたかった。椿は、そういうものとは無縁です。

椿の描き方、これは研究・調査の上で大事なのですが、冬瓜を描いた 2 点の作品があります【図 5・図 6】。数年後にまた同じ構図で描いているんです。どれだけ問題意識があったのか。しかも、改めて同じ構図で冬瓜を描いたときには、3 年もかかっている。つまり、単なる見たままのリアリズムではない。だって目の前の冬瓜は、もう 3 年前の冬瓜ではない。それはもう、絵の中にしかない。最初に描いた方は前から知られていたけれど、3 年かけて描いた作品が展覧会で紹介されるのは今回が初めてです。1 点だけあっても分からなかったわけで。こういう例がどんどん出てくると、たぶん椿という画家の実像がもっと分かるのではないかと気はしますね。

期待したいですね。この展覧会をきっかけに、千葉ゆかりの画家、椿貞雄の調査が進むことを。

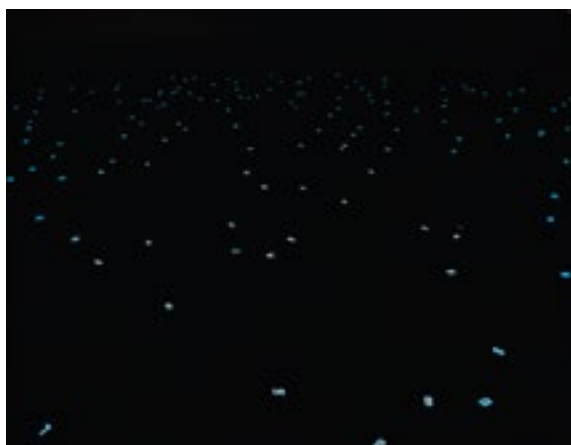
【話し手：上席学芸員 薬科英也】

「没後60年 椿貞雄 師・劉生、そして家族とともに」  
会期：2017年6月7日（水）～7月30日（日）  
休館日：7月3日（月）  
観覧料：一般1,200円（960円）、大学生700円（560円）、小・中学生、高校生無料  
同時開催：椿貞雄をめぐる―千葉ゆかりの美術

URAGAWA

Selected Works  
from CCMA Collection  
— Paintings and Prints  
from Edo Period /  
Contemporary Art

いま／むかし  
CCMAコレクション  
うらがわ



宮島達男《地の天》1996年



歌川国芳《相馬の古内裏》天保(1830-44)後期

## 裏側からのメッセージ

2フロアの展示室全てを使って開催する、所蔵作品展「うらがわ」。夏休みにふさわしく、当館のコレクションを存分に楽しんでいただこうという企画です。任されたのは、若手2人を中心としたスタッフ。来館者の皆さんと作品を鑑賞する楽しみを共有したい、という気持ちを大切にしながら、展示構成を考えました。それでは、「うらがわ」の裏側からのメッセージをお届けしましょう。

「うらがわ」をキーワードに、今回いろいろなテーマが出ましたよね。

心・内面というのと、形として透けたり裏返ったり覗き見たり、裏側を見るというもの。制作の裏側も。それから、舞台裏、三面記事。怖いものもあります。

異界めいたもの。妖怪とか。

そうそう、化け物コーナー。幕末明治の怪談ものとかも展示しますよね。

人気があるけれども、最近展示の機会のなかった国芳の《相馬の古内裏》。それから、実はまとまった数がある月岡芳年の作品も出したいと思いました。

宮島達男さんの《地の天》。思いつき裏側、ひっくり返ってますよね。地に天があるんだから。

美術館の「うらがわ」にいる人々、つまりスタッフとして、どのように美術館を楽しんでもらいたいと思っていますか？

古美術でも、人の営みの中で作ったものだから、もっと気軽に見てほしいですね。特に今回展示予定の作品は、仏画のように信仰の対象であったものではないし……。

せっかくなので、展示室では、目の前にある作品について思うことや気づいたことを、心の内にしまわずに、言葉に出しながら見てもらいたいですね。

でも、作品をめぐる会話というのは、なかなか難しいのかな？ 何を話したら良いかわからないとか、たまに聞きますが。

誰かと共有しながら展覧会を観るという楽しみを、ぜひ体験してもらいたいですね。

展示や作品をめぐる会話を促すようなツールも仕掛けていきたいです！

去年の「ふたつの柱」展の鑑賞ワークショップはすごく反応が良かったなと思います。ちょっとした視点の提案で、作品の見方が変わったようだったし、そういう体験の後だったら、作品についてたくさん語りたくなるんだろうなあ。

ウォーミングアップが必要だってこと？

そんな感じもしました。今年も、アプローチとして普段やらないことも提案できたらいいなと思っています。たとえば「覗き見る」といったアクションなども。

今回は、小さなお子さんとも楽しく鑑賞できる仕掛けを盛り込んだ「親子デー」や、展示の裏側を覗く意味で、ライティングのワークショップも開催します。

「中学生のためのギャラリークルーズ」や「はてな先生」もありますね。美術館の頼もしい裏方・ボランティアスタッフの活躍にも期待します。

8/20(日)には縁日もありますよ。美術館とコレクションを丸ごと楽しんでもらえれば！

### 千葉市美術館 × DELFONICS オリジナルRollbahn販売中！

千葉市美術館の所蔵作品が、DELFONICSの看板商品 Rollbahn ノートとコラボレーションしました。

図柄は、歌川国芳《相馬の古内裏》と鈴木春信《鞠と男女》の2種。

罫線が方眼なので、文章もイラストも書き入れやすく、ノートの後ろにはクリアポケットがついている優れもの。展覧会チケットを入れて、鑑賞ノートとして使ってみては？ 当館ミュージアムショップのみの限定販売です。



デザイン 谷田幸  
価格 650円(税込)

## ボランティア日和

動物園の入口では子どもも大人もウキウキとした、にこやかな笑顔です。想いは、これから出会える動物たちで一杯なのでしょう。

さて美術館ではどうでしょう？ 美術館の入口で、にこやかな笑顔は少ないようにみえます。

伊藤亜紗著『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社新書、2015)に美術鑑賞の話があります。視覚障害の方が友人に「美術館に行ってしまうことがあったら、良かった、という気持ちになるのか?」と尋ねました。それに対して友人は「作品を見て、

新しい発見があったりだとか、気づきがあったりだとか、感動したときが、行って良かったと思う時だ」と答えました。それを聞いて視覚障害の彼は、新しい発見や気づき、感動があれば美術館に行けるかも、と思ったそうです。皆さんは美術館へ行って良かったと思うのはどのような時でしょう。

夏休みに千葉市美術館を訪れた子供たちの質問に答える「はてな先生」をした時のことです。祖母と小学3年の男の子の二人連れがみえました。どうも、男の子は渋々連れてこられた雰囲気たっぷりの様子。受付で棟

方志功の釈迦十大弟子の紙細工「弟子たちは、どんな顔」を渡すときちょっと笑み。河井寛次郎の陶芸3作品の写真を渡し、「探してみてね」と送り出しました。

鑑賞後の感想を聞くと男の子は、ニコニコしながら得意げに《三色打葉扁壺》を示し、「形と色が格好良かった」と楽しそうに答え、それを見ていた祖母は、とても嬉しそうでした。

にこやかな笑顔で美術館を後にした二人は、どのような会話をしたのでしょうか？

「美術館ボランティア 西田賢二」

### 千葉市美術館 友の会はこんなにお得！

◆年会費 2,500 円で何度でも展覧会が見られる！

◆会員の同伴者が割引または無料に。さらに展覧会招待券もプレゼント！お友だちとご一緒に鑑賞してみては？

◆ミュージアムショップやレストランでも割引！

◆バスツアーなど会員限定のイベントも。

その他特典が盛りだくさん。詳しくはパンフレットをご覧ください。ご入会を待ちしております。

